

平成30年度第19回講演会 記録

日 時	平成31年2月9日(土) 13時～16時	
会 場	此花会館 梅香殿	
講 師	京都大学名誉教授 竹内 典之 先生	
演 題	日本林業再生への道：人工林問題	
備 考	参加者数 155名(会員154名、聴講 1名)	記録 藤原雄平

竹内典之先生は、森林学者として永年京都大学研究林（北海道、和歌山、芦生の森）等で研究教育・管理に携わってこられました。2003年、森から海までをつなぐ地球環境科学研究構想に基づくフィールド科学教育研究センターの立ち上げに関わられ、副センター長を務められ、また「森里海連環学」提唱者のお一人として活躍されました。竹内先生は森から海へ、田中先生は海から森へと、ともに森里海連環学の発展に研鑽を積んでおられます。



<講演要旨>

1. 森づくりに関わることになった経緯

- (1) 1944年、京都の嵐山に生まれ育った。生家の周辺は農村で田畑があり、近くには森があった。山では柴刈りが行われていたが、昭和20年代末には用水路がコンクリートで固められ、排水路に変わり、そのうち田畑や森が宅地になっていった。古い集落が新しい集落に変わるにつれて子供たちの居場所が失われ、自分の関心は山に向かった。中高生時代には愛宕山(年に7～8回登山)、比叡山、京都北山、大台ヶ原などによく登った。山はピークハンティングが目的ではなく、(、) 林を観るために登ったのである。
- (2) 1964年、京大農学部林学科に進学。同じ思考の仲間4人組で、南アルプス(仙丈岳、聖岳など)、屋久島(宮之浦岳、永田岳)、白神山地(白神岳、大崩岳)などから、岩木山、戸隠山、御岳山、剣山、久住山(、釧路湿原トル)など、北から南まで日本の多様な森を歩いた。低地から高地へと変化する植物を観察するのが楽しかった。
- (3) 1971年、京大農学部演習林助手に採用され、北海道演習林に赴任。飛行機の窓から見た釧路湿原と大規模牧場の姿は強く印象付けられた。北海道では、森の現状とそれらがどう使われているかを調査するために各地を歩いた。雄阿寒岳(エゾマツ、トドマツの針葉樹林)、知床羅臼岳(針広混交林)、大雪山(針葉樹林)など、さらに京大演習林の天然林、ミズナラ再生林、トドマツやカラマツの人工林など。この時の経験と知識から、次項に述べる自分なりの森づくりの指針を生むことが出来た。

(4) 森づくりの指針

Diversity=森の多様性の保全(遺伝子レベル、種レベル、生態系レベル)

Productivity=生産性の確保

Balance=調和の維持

Climate=風土に適した手法

4つの要素を基本に、明るい森作り、特に子供たちの声が聞こえる森づくりを目標に活動してきた。最近この考え方に同調してくれる人が増えてきている。

質問：森と林の違いは何ですか？

回答：特に定義はない。一般的に林は平面的、人工的で、森は天然のイメージがある。

2. 古代、中世以降の日本の森林資源の変遷について

- (1) 古代、都の周辺では森林劣化が進み、676年には伐禁令が出されるほどだった。平城京から平安京へ遷都されたのも木津川上流が荒廃したことによる。平安京は桂川の上流域の森林資源が利用できた。この時代、森林劣化が全国的な規模にならなかったのは、人口が少なかったこと、支配層の力不足、水稲栽培（水源の森を大切にした）による。
- (2) 中世では、権力の集中、政治経済の安定による人口増加のため、全国規模で森林資源が収奪され、森林の劣化が拡大した。
- (3) 近世（江戸期）になると、長い間民衆が緩やかな縛りの下で管理されてきた森林の区画と利用権が明確化され、保護、管理に対する施策が全国的に行われるようになった。17世紀半ばに至り、人工造林が奨励され、屋敷林の造成命令が出た。

そして、人工造林の先進地では民間林業が出現し、民間活動による人工林育成が進んだ。例えば、西川林業（荒川）の注文伐採、飢肥林業（宮崎）のオビスギの挿し木造林、山武林業（千葉）複層林造成、万沢林業（山梨）肥料木混植、など。

- (4) 江戸末期～明治、政変の間に、森林荒廃が進み、森林や沿岸海洋域は大きく変化した。特に変化が大きかった北海道では、松前藩が農業生産に消極的（人口増を抑制）で漁業を推奨した結果、薪炭材、絞油用材の使用が増えて森林が劣化し、ハゲ山化した。森林と沿岸海洋域（魚）との関係をみることができる。

3. 20世紀100年における日本の森林の変遷について

- (1) 日清・日露戦争のころ、所有者不明林の国有林化が進められたが、その後に国有林の払い下げが行われ、森林は減少した（例えば、北海道では、1897年に1,058万haあった森林が1,934年には684万haに減少）。
ニシンの漁獲量との関係でみると、国有林の伐採量増加に反比例してニシンの漁獲量が減少している。
- (2) 戦中・戦後期には、軍需用、復興用に木材の需要が増大。造林が促進され、スギ・ヒノキが適地とは無関係に植えられ500万haの人工林が生まれた。
- (3) 1950～1960年代：台風など自然災害から木材需要が増加。チェーンソーも普及し生産量が増大した。
- (4) 1970年代：生活環境が変化（エネルギー革命）
- (5) 1980年代：自然環境としての森林の重要性が強ク認識されるようになった。1992年の地球サミットでは森林の重要性、森林は持続的に経営されるべきものと認識された。

5. 21世紀への課題

- (1) 持続的発展が可能な社会の構築の中で、森林は緑豊かな空間であり、保水力豊かな土壌を育み、エネルギー源自体の再生可能な存在である。林業は森林の整備と再生・維持が持続可能でなければならない。
- (2) これまで、アファンの森や津和野町などで森づくりに携わってきた。これからも、「明るい森」、「美しい森」、「子供たちの声が聞こえる森」を少しでも増やすべく頑張りたい。

ご清聴ありがとうございました。

【Q&A】

Q：親から引き継いだ森林の扱いに困っている。国が買い取るとか何か手立てはないでしょうか？

A：所有権の移転は難しい。既に国は既存のもので苦労している。

【田中克先生コメント】

森林とか林業への対応は急ぎ過ぎてはいけない。森の維持は、稲作の水の元、稲作の支えに繋がることや、ニシンの漁獲量と森林の伐採量とが関係することなど、まさに森里海の連環である。竹内先生が手掛けられた森で子供たちは遊んで人間力を高めて欲しいと願っています。

以上